

古典文学にみる「中の戸」の仕切りの建築論(1)

—『栄花物語』の場合—

正会員 ○川本 豊*1 同 市川 秀和*2

9. 建築歴史・意匠—6. 建築論

壁, 仕切り, 中の戸, 母屋, 栄花物語

1. はじめに

本発表ではわが国の古典文学にみられる「中の戸」(中の障子)と呼ばれる、主に寝殿造の母屋(もや)の仕切りに使用されている言葉を巡って、その空間現象の様相を中心に考察を行う。

本研究の発端のひとつは、増田友也氏の初期論文¹⁾に触発された、わが国の「壁」に対する疑問からである。ここではさらにもう少し、その表象する範囲を広げておく必要性を感じたため、「壁」ではなく、「仕切り」あるいは「隔て」という言葉を使用することとした。

ちなみに、現代使われている「壁」とは、「建物の周囲、または内部を区切る仕切り。草や板などでも作るが、多くは土を用いて作る。」²⁾とあり、これを見るかぎり、わが国においては、いずれの時代の「住まい」においても使用できる語とは必ずしも云い難いということになる。

さて母屋は、周知のごとく寝殿のなかでもとくに主(あるじ)の使用する場所とされ、その位置づけは極めて重いものがある。この寝殿の中心部にあたる母屋(奥部)を仕切るものを基本的にさすといわれる「中の戸」は、寝殿造とともに遺構がほとんどないため建築史的には十分に解明されているとは言えないかもしれない³⁾。しかしながら、その言葉の重要性においても、わが国の古典文学を資料として「仕切り」(壁)を考察するなかでは、ふれておかなければならないものの一つであろう。

2. 「中の戸」(なかの戸)の語義について

まず『日本国語大辞典』(第二版)より、それぞれの語義をみておく。

・なかの戸(中の戸)

①間の戸。部屋と部屋の間にある戸。

凡例として、『源氏物語』「若菜上」が引かれている。

②清涼殿北廂の東第一間と第二間との間の戸。萩の戸と藤壺の上局の境の戸をいう。

凡例として、『栄花物語』「殿上の花見」が引かれている。

(なお、この②は建物上の場所が明らかに規定されており、また「萩の戸」についても疑問が残るため⁴⁾、ここであつかう「中の戸」とはいちおう切り離して考えたい。)

・中障子(中の障子)

①部屋を仕切つてある、ふすま障子やついたて障子など。

同じ使われ方として「なかの障子」の項目が別にあり、その凡例として、『源氏物語』「若菜上」および「早蕨」が引かれている。

このように語義でみる限りでは、部屋と部屋との間にある、通常の仕切りとしての使われ方が記述されるにとどまっている。

しかし、『源氏物語』若菜上の場面などは、国文学の先行研究がたびたび取り上げていることから、上記の単純な意味合いによる建具(間仕切り)としてのみでおさめてしまうことは、本論の目的からも許されないであろう。(なお『源氏物語』については次の課題とする。)

ここでは、まず11世紀前半に成立したとされる『栄花物語』から、「なかの戸(中の戸)」の部分に

Study on "Naka no To" in the classical literature (1), in case of the "Eiga-monogatari"

KAWAMOTO Yutaka, ICHIKAWA Hidekazu

について、具体的に検討を行なう。なお本文の引用は、梅沢本を底本とする、山中裕他校注・訳『栄花物語①②③』(全三冊)新編日本古典文学全集31・32・33(1995・1997・1998年 小学館)による。(引用文の下線は、いずれも引用者による)

3. 『栄花物語』の場合

『栄花物語』には、「中の戸」の表記が四か所みられる。これを巻の順に検証する。

まず寛弘五年(1008)十月、一条帝が若宮(敦成親王)との対面のため、彰子が出産で退出している土御門第へ行幸される場面である⁵⁾。この記述の直前には、花山院の崩御、次いで娛子内親王薨去が記されており、ここでも物語に通底して描かれる、生と死という時間の流れが対比的に表出されている。

巻第八 はつはな

[五二]殿、若宮抱きたてまつらせたまひて、御前に率てたてまつらせたまふ。御声いと若し。弁の宰相の君、御剣とりてまゐりたまふ。母屋の中の戸の西に、殿の上のおはします方にぞ、若宮はおはしませたまふ。上の見たてまつらせたまふ御心地、思ひやりきこえさすべし。(①414~5頁)

この前段に一条帝を迎えるために、寝殿(母屋)のしつらえを変えた様子が記されており、日本建築では室の可変性も重要な事象であり、順序が逆になったが参考のためこれも引いておく⁶⁾。

[五一]寝殿の御しつらひなど、さまゑへしつらひなさせたまひて、御帳の西の方に御倚子立てさせたまへり。それより東の方にあたれる際(きは)に、北南の端(つま)に御簾懸けわたして女房ゐたる南の端(はし)のもとに簾あり、すこし引き上げて内侍二人出づ。(①413頁)

引用書頭注では、「天皇の御座を寝殿母屋の中央の間に、御倚子を南廂の中央から一つ東の柱間に置いた。」として、母屋の中央の間を設定しており、ここである「中の戸」はその西側に接する襖障子というのであろう。この場合は、母屋の東には彰子が、西

には倫子が居たことになる⁷⁾。

ここでおさえておきたいことは、この「中の戸」と呼ばれている建具の、物理的な脆弱性にも拘らず、非常に重大な仕切りとしての遮蔽性を保持していることである。もちろん次にみるように、その柔軟な可動性を生かした使われ方もあったことも当然であろう。よってこのような空間現象の二面性(両義性)に注目しておく必要がある。

次にあげる「巻第三十一」以降の三例は、道長薨去を記す「巻第三十」までの正編といわれている部分を書き継いだ、続編とされる部分であり、作者も不明であり正編と異なっている可能性も想定されている。さらにさきの語義で指摘したように、「巻第三十一」にある「中の戸」は②に相当し、引用書頭注に、「清涼殿の北廂の東第一間と第二間との間にある戸」と明記されており、場所は母屋ではない。よってここでは用語の類例として本文の引用に留める。

長元六年(1033)、賀茂祭も過ぎてのどかな落着いた気分のうちに、内裏に入御した女院(彰子)と大宮(威子・後一条后)との対面の場面であり、ともに道長の娘で、つまり実の姉妹の顔合わせということになる。その際に、「中の戸あけて」対面したとされる。ただし、その場所は繰り返すが、廂の間である。

巻第三十一 殿上の花見

[三二]大宮よさり上らせたまひて、中の戸あけて御対面あるほど、いとやすらかに疎からず、めでたき御あはひなり。よき人の御あはひは、恥ぢかはしなうさせたまひて、つゆけはひも漏らさじとつつみ、女房なども心したり。内、東宮渡りおはしますも、いとめでたしともおろかなり。(③221~2頁)

次は長暦元年(1037)十二月、一品宮(章子内親王・威子娘)の裳着の場面になる。その夜そのまま東宮(親仁親王・後冷泉帝)妃として参入されることになる。

巻第三十四 暮まつほし

[一四]その日になりぬれば、東宮の御しつらひは、

寝殿の西面にし、一品宮の御方は、もとの東面なれど、今すこし広く、中の戸のこなた、やがてしつらはせたまへり。御帳などは、殿より奉らせたまへり。(③295頁)

ここでは「中の戸」の場所は母屋である。一品宮は母屋の東面、東宮の部屋は西面とされている。装着の当日、少し部屋が手狭になったので西面の「中の戸」までを御座所にあてたと読める。これは増田繁夫氏が指摘するように、もともと母屋中央に馬道のようなものがあり、それを取り込んで使ったとも考えても不都合はなかろう8)。

つまり東面、西面ともに馬道に面して「中の戸」(襖障子)が設置されて、時に応じて取り外したりされていたとも考えられよう。この建具の保持する柔軟性(融通性)により、部屋自体が膨らんだり狭まったりするという空間現象にも着目しておく。

四例目は、女院(彰子)と中宮(章子内親王・後冷泉后)との対面の場面である。場所の特定は文面からでは不明であるが、母屋と廂の関係性がみられよう。その間の仕切りをここでは「中の戸」とよんでいることになる。つまり母屋の内部という同じヒエラルキーに属する場所における「中の戸」本来の意味での仕切りではなく、母屋と廂という階層の異なる場所との仕切りの呼称でも使用されていることに留意しておかなければならない。しかしながらその場所性からして、そこに集うのは、女院、中宮、帝という最上層に位置づけられる人たちである。

巻第三十七 けぶりの後

[二三]中宮の上の御局は、院のおはします西なり。例の藤壺の上の御局なり。渡らせたまひて、中の戸あけておはします。今姫宮とも申しつべく若くをかしげにはなばなとめでたく、花を折りたるやうにておはします。「あなかたじけな。この上におはしませ」と申させたまへど、いと狭きほどなれば、なほ下におはします。東の方よりうち渡らせたまひて、長押におしかからせたまひておはします。左右に、帝、后を下に据ゑたてまつらせたまひておはします院の御有様こそ、今始めぬことなれど、なほめでた

けれ。(③418~9頁)

治暦三年(1067)五月、最勝講のため女院彰子が内裏(高陽院)に参入した。

彰子の部屋と藤壺の上の御局の間の戸を「中の戸」とよび、それを開けて彰子がいらっしゃる。中宮が下座になるので自分の御座に誘うが、狭くてそれならず、やがて帝もお出ましになり、長押に寄りかかっておられる。上座に居る彰子、長押に寄りかかって帝と中宮という配置をめぐる描きぶりである。

以上、『栄花物語』では、母屋内での「中の戸」が二例、その他の場所が二例となっている。とりわけ母屋内の二例に表れる「中の戸」を介した空間現象の様相について、次の課題としている『源氏物語』における検討との比較のために、ここでは注目しておく必要がある。

4. おわりに

「中の戸」(中の障子)という障屏具9)による空間現象の様相について、まず『栄花物語』から当該部分を引用しつつ、各場面についての検証を行った。ただ『栄花物語』は歴史物語として位置付けられ、藤原道長一族の栄華を賛美することに主眼が置かれており深い心理描写というよりも、リアリティーを伴ってはいるが、史実の列挙という面が大きいので、『源氏物語』とは趣を異にしていることは否めない。引用文からは、この「中の戸」の仕切りというのは、たとえば東面と西面に分かれて居る人たちにとっては重い意味合いを隔てているとも考えられるが、これはそこに居る人にとってのことに限定されることは文脈からも明らかであろう。

「中の戸」は、打ち壊すことの容易い物理的には脆弱な仕切りではあるが、その両間を隔てることによって、盤石の重みをもち始めるのである。しかし『栄花物語』においては、この「中の戸」で隔てられているのは、いわば身内同士(内-内)が中心で、これを「あけて」対面したとあるように親密な関係性が読み取れ、これをここでは中/中と表記する。仕切りあるいは隔てとしての「壁」の現象の様相について、西欧に比して、物理的には力弱いと表現

されるわが国の「壁」ではあるが¹⁰⁾、一方でその心理的な遮蔽性は、当時の社会構造と相まって、非常に重いものがあるといえよう。

次の課題として、深い心理描写のある『源氏物語』における同様の用例について検証を行ない、ここでの対象概念としての中／中という観点から、さらに分析概念としての〈奥〉¹¹⁾をふまえた中／奥という観点へと「中の戸」の様相について考えてみたい。

【註】(出版年は便宜上、引用者において西暦年に統一した。)

- 1) 増田友也「壁と私と空間と」『現代日本建築家全集 一四』三一書房、1972年。

増田友也論については市川秀和氏の精緻な研究がある。(平成28年度建築学会近畿支部研究発表など。)

- 2) 『日本国語大辞典』(第二版) 小学館 による。

なお「壁」の項において、建築的な壁については一項目のみと案外に少なく、凡例として、『源氏物語』(帯木)と『大鏡』三・伊尹からそれぞれ一例を引くのみである。

- 3) 寝殿造の典型として『家屋雑考』のシンメトリーな図が一般的にはよく取り上げられるが、時代による変容あるいは所有者である貴族の地位などによってもさまざまな形態があることは疑えない。道長の土御門殿も非対称の配置の試案があり、例外ではない。

- 4) 岩佐美代子氏は、清涼殿の「萩の戸」について、通常の説明図として使用されている裏松固禪『大内裏図考証』にある平面図の位置ではなく、島田武彦氏「萩戸について」(日本建築学会大会学術講演梗概集(日本建築学会大会学術講演梗概集(計画系)1971年度)の考察に基づいて、清涼殿北庇東面妻戸の称と繰り返して主張されている。語義でみたように「戸」に部屋の意があげられていないことからして、看過できない指摘と考える。

岩佐美代子『讃岐典侍日記全注釈』笠間書院、2012年(155頁) など。

- 5) この部分の記述は、『紫式部日記』をもとになされたと推測されている。日記冒頭の「秋のけはひ入りたつままに、土御門殿の有様、いはむかたなくをかし。」

の部分が、やはり『栄花物語』にも若干言葉を変えてではあるが使われている。

- 6) 引用書頭注によると、この部分については、註5)『紫式部日記』の記述を他資料とも合致するため正とし、『栄花物語』の記述は「写し違いか」とする。

- 7) 増田繁夫「寝殿の構造 一中の戸・塗籠・二間一」『源氏物語と貴族社会』吉川弘文館、2002年。「この物語(源氏物語-引用者補)では、寝殿の母屋を東西に二分して、二人で住み分けている例が多い。(中略)これらではいずれも上位者が東の母屋にいる。」(210~1頁)

「母屋についても単に「中の戸」とあっても、それは東西の母屋を隔てるのが障子一枚とは限らず、中央部の馬道のような一間の東西両側の戸を、それぞれの側の母屋からして「中の戸」と呼ぶことがあった、と考えられるのである。」(214~5頁)

- 8) 引用書頭注13(③295頁)。

「其ノ儀ハ寝殿ノ東ノ三間ヲ御座所ト為」『平行親記』とあり、中央の一間分を取り込んで宮の御座所を三間としたものと読んで不都合はないであろう。この中央の一間は、馬道などの緩衝スペースとして位置付けられ、時に応じて、取り込むことがなされていたのではない。これは註7)増田氏の指摘にも符合する。

- 9) 高橋康夫『物語ものの建築史 建具のはなし』鹿島出版会、1985年。

また当時の障屏具の機能については、金秀美『源氏物語の空間表現論』武蔵野書院、2008年に詳しい。

- 10) 「たしかに壁はあるが、それは不思議に力弱い。」と表現するのは多木浩二である。(場所の連鎖『生きられた家』田畑書店、1976年。)また「伝統的な空間知覚では水平面の差異(とくに高さ)によって空間が分節されていたように思える。」(57頁)と述べ、そこを出来事のための「場所」としてとらえている。

- 11) 拙稿「〈奥〉の精神的考察 —『讃岐典侍日記』(下巻)における時間・空間—」『佛教大学大学院紀要文学研究科篇』第40号、2012年 などにおいて、分析概念としての〈奥〉について、実体としては捉えきれない側面を、その特徴として指摘した。

*1 福井工業大学 市川研究室 修士(文学)

*2 福井工業大学 教授・博士(工学)

Ichikawa Labo., Fukui University of Technology, M.Litt.
Prof., Fukui University of Technology, Dr. Eng.

古典文学にみる「中の戸」の仕切りの建築論 (2)

—『源氏物語』の場合—

正会員 ○川本 豊*1 同 市川 秀和*2

9. 建築歴史・意匠— 6. 建築論
壁、仕切り、中の戸、奥、源氏物語

1. はじめに

古典文学にみられる「中の戸」(中の障子)と呼ばれる、主に寝殿造の母屋の仕切りに使用されている言葉を巡り、その空間現象の様相の建築論的考察を行っている。前回発表¹⁾では、『栄花物語』を取り上げ、そこに現われる「中の戸」を介した空間現象の検証を行い、そこでの血縁の身内同士(内—内)間の親密な関係性を、中／中と位置付けた。本発表では、さらに「中」と「奥」の関係へ考察を進める。

増田友也は初期論文²⁾において、壁と私との空間的関係性を「隔離」現象から言及していった。これに示唆を受けた本研究では、わが国の古代の住まいを主な対象とするため、「仕切り」あるいは「隔て」という言葉に置き換えて使用することとした。

さて寝殿の中心部の母屋(奥部)は、主(あるじ)の使用する場所であり、「中の戸」とは、この母屋を仕切るものを基本的にさすといわれている。わが国の古代を中心とした古典文学を資料として「仕切り」の建築論的な考察を試みる本研究において、ふれておかなければならないものの一つと考えられる。

2. 『源氏物語』の場合 その一

『栄花物語』は、史実に基づいており登場者は基本的に実在の人物である。その中心となる藤原道長と時代を同じくした、紫式部の手になる『源氏物語』はリアルではあるが、あくまでも架空の物語である。この『源氏物語』には、「中の戸」の表記が四か所みられる。また「中の障子」の表記も二か所みられる。

なお、「若菜 上 二〇」にある明石の君と女三の宮との対面の場面については論の流れの関係上、最後にまわす。

本文の引用は、通称「大島本」を底本とする、阿部秋生他校注・訳『源氏物語④⑤』(全六冊のうち)新編日本古典文学全集23・24 (1996年・1997年 小学館)による。(引用文の下線は、いずれも引用者による。)

「匂兵部卿」以降の巻は、第三部と位置づけられる光源氏亡きあとの物語である。

まず冷泉院にお輿入れが決まった玉鬘の娘である大君が、妹にあたる中の君と別れを惜しむ場面である。姉妹二人は中の戸を隔てて、東面と西面に住み分けているが、いまはそれを「いぶせきもの」(うっとうしい仕切り)とさえ思うのである。前回発表にみた、中／中の関係性がここでもみてとれる。

「竹河」 [一三] 見れば、姫君二ところうち語らひて、いといたう屈じたまへり。夜昼もろともにならひたまひて、中の戸ばかり隔てたる西東をだにいといぶせきものにしまひて、かたみに渡り通ひおはするを、よそよそにならむことを思すなりけり。心ことにしたて、ひきつくるひたまへる御さまいとをかし。(⑤89～90頁)

姉妹という間柄ゆえにか、中の戸を通してお互いに行き来している様が見える。このさき、それすらもできなくなってしまうことを「よそよそにならむ」(居所が遠く離れて別れ別れになる)として、悲しい思いに沈むのである。

「中の戸」は当時の障屏具の一つであり、東西に仕切る機能を果たしているが、このように、姉妹といった立場をほぼ同じくする者同士が隣接する場合

Study on “Naka no To” in the classical literature (2), in case of the “Genji-monogatari”

KAWAMOTO Yutaka, ICHIKAWA Hidekazu

には、お互いに行き来していることがわかる。ここから仕切り（隔て）としての「中の戸」の物理的な脆弱性に反し、深い精神的な相互作用が読み取れる。

次は、亡き八の宮の娘である大君のもとに、思慕する心を抑えきれずに参入した薫との対面の場面である。西面に居る大君に対面するため、薫は西廂に通されている。薫の並々ならぬ気配に気づいた大君は「わづらはしく」思うが、といってそうもいかず、表面上はおだやかに対面する。仏間となっている西面の南北を仕切る間仕切りをここでは「中の戸」とよんでいるのであろう。大君はこれを開けて、わざわざ「奥」の仏のお像を見えるようにする。これは逆の見方をすれば、薫が仏（奥）から見られていることになる。このようにいわば奥からの、仏の照覧にささえられつつ、さらに簾と屏風を立て添えて厳重なしつらえのもと、大君は西廂の薫と対面しているのである。そのしつらえの様が以下の引用である。

「総角」 [三] わづらはしくて、うちとけて聞こえたまはむこともいよいよ苦しけれど、おほかたにてはありがたくあはれなる人の御心なれば、こよなくもてなしがたくて対面したまふ。仏のおはする中の戸を開けて、御灯明の灯けざやかにかかげさせて、簾に屏風をそへてぞおはする。外にも大殿油まゐらすれど、「なやましうて無礼なるを。あらはに」など諫めて、たかはらに臥したまへり。

(⑤232頁)

これに対する薫の心境の部分に次に引用するが、ここで使われる表現、言葉には仕切りを考えるうえで非常に興味深いものがある。

かくほどもなき物の隔てばかりを障りどころにて、おぼつかなく思ひつつ過ぐす心おそさの、あまりをこがましくもあるかなと思ひつづけらるれど、つれなくて、おほかたの世の中のことども、あはれにもをかしくも、さまざま聞きどころ多く語らひきこえたまふ。(⑤233頁)

このように薫はこれら一連の障屏具(仕切り)を「かくほどもなき」(なんのこともない)と明らかに認識している。つまり裏返しに言えば、力づくで行為に及べば容易いことであることは歴然なのである。しかし薫は、しばらく自らの優柔不断さを嘆きつつも、他愛ない世間話を続けている。つまりこの物理的に脆弱な仕切りという空間の様相を利用して、暗に薫の人柄が表象されていると考えられる。

次の例は、「中の障子」である。

六条院の春の町、寝殿の西面には正妻として女三の宮が、そして懷妊した明石の女御が里下がりして東面を居処とする。女三の宮が住まう西面にいた光源氏は、「中の障子」から突然に東面の明石の女御の部屋に参入する。

「若菜上」 [三二] 院は、姫宮の御方におはしけるを、中の御障子よりふと渡りたまへれば、えしもひき隠さで、御几帳をすこし引き寄せて、みづからははた隠れたまへり。「若宮はおどろきたまへりや。時の間も恋しきわざなりけり」と聞こえたまへば、御息所は答へも聞こえたまはねば、御方、「対に渡しきこえたまひつ」と聞こえたまふ。

(④124頁)

ここでは「中の御障子」となっているが、引用書頭注にもあるように「中の戸」と同義である³⁾。六条院の主である光源氏は、誰はばかりことなく、それぞれの居処についても仕切りを介して自由に入出り可能であることがわかる。「ふと渡りたまへれば」と、突然の闖入であり、明石の君と女御母子は狼狽するのである。なお引用文末の「対」とは紫の上の居る東の対をさす。当時の社会的な身分上から、寝殿に彼女の居場所はない。内の事情はどうであれ、外向きの厳しい現実にはさらされる紫の上である。

次に移る。大君を喪って悲しみに沈む中の君が居る宇治を薫が訪れる。躊躇する中の君は女房たちに説得されて対面する。ここでも薫の居場所は「総角」の時と同じく西廂である。よそよそしい客人扱いである。この翌日に、中の君は京の二条院に入る。

「早蕨」[四]「はしたなしと思はれたてまつらむとしも思はねど、いさや、心地も例のやうにもおぼえず、かき乱りつつ、いとどはかばかしからひぬが言もやとつつまじうて」など、苦しげに思いたれど、「いとほし」など、これかれ聞こえて、中の障子の口にて対面したまへり。(⑤354～5頁)

ここでの「中の障子」も「総角」の場合と同じく、中の君のいる母屋西面と、薫のいる西廂とを隔てる仕切りと考えられる。つまり寝殿内の障屏具ではなく廂との境においても同様の言葉が使われており、この使用例はさきの『栄花物語』にもみられた。

3. 『源氏物語』の場合 その二

さて最後に「若菜 上」にある明石の君と女三の宮との対面の場面についてみておきたい。さきにも述べたがこの場面は国文学での先行研究も多く、さまざまな角度からの論究がなされている⁴⁾。ここでは、「中の戸」という空間を隔てる仕切りの機能と意味について、またこの場面の描写における人間行為と相互の精神性について建築論的に検証を試みる。

懷妊した明石の女御が里下がりして、母屋の東面に居処を定める。その西面には正妻となった女三の宮が居る。その両者を隔てるのが「中の戸」である。そこに、社会的には微妙な立場に追いやられたことになる紫の上が、からんでくることになる。

「若菜 上」[二〇] 姫宮のおはします殿の東面に御方はしつらひたり。明石の御方、今は御身に添ひて出で入りたまふも、あらまほしき御宿世なりかし。対の上、こなた渡りて、対面したまふついでに、「姫宮にも、中の戸開けて聞こえむ。かねてよりもさやうに思ひしかど、ついでなきにはつまじきを、かかるをりに聞こえ馴れなば、心やすくなむあるべき」と、大殿に聞こえたまへば、うち笑みて、「思ふやうなるべき御語らひにこそはあなれ。いと幼げにものしたまふめるを、うしろやすく教へなしたまへかし」とゆるしきこえたまふ。

(④86～7頁)

ここで紫の上がとった機転が見事である。当然のことながら、女三の宮と明石の女御は寝殿内の東西面からいわば対等に対面することになることが予見できる。そこで主である光源氏に対して、養母としての立場から明石の女御と東面に同席して、いわばついでに女三の宮と対面を終えようと、許しを願い出るのである。光源氏はこれ幸いと、まだ幼い女三の宮をみてやってほしいとして、それを許す。

[二〇] 東宮の御方は、実の母君よりも、この御方をば睦ましきものに頼みきこえたまへり。いとうつくしげにおとなびまさりたまへるを、思ひ隔てずかなしと見たてまつりたまふ。御物語などいとなつかしく聞こえかはしたまひて、中の戸開けて、宮(女三の宮)にも対面したまへり。(④90頁)

明石の女御は、実の母である明石の君よりは、養母である紫の上を、ことのほか頼りとなされており、また紫の上も大人びなれた女御をいとおしく思われて、しばしうちとけた時間を過ごされる。つまりこれはこの後に控える対面に向けての上の心準備ととれる設定ではないか。かかる女三の宮と紫の上との対面の描写から、深い精神性が読み取れてくる。もちろんこの精神的な意味を認識しているのは紫の上一人であろうが。

そしていよいよ「中の戸」を開けての対面となる。ここで考えられることは、「中の戸」を開放することはすなわち、お互いの居処の〈奥〉までもオープンにしていることになるのではないかということである。もちろん〈奥〉とは無限定なものとして措定されるものであり⁵⁾、すべてを見せる(見える)わけではないが、ここではやはりその深奥部を垣間見せることになることには間違いのないであろう。

以上の考察から、「奥」という言葉にこだわってきたが、ここでもう一つの重要な言葉があらためて浮かびあがってくる。それが「中」である。「仕切り」とか「隔て」という視点から、「戸」に注意を引かれていたが、〈奥〉において「中」のもつ意味の重要性がいつそう明確に照らし出されてくると考えられる。従って〈奥〉と対比される言葉としての位置づけも可能ではなかろうか。

4. むすび

「中の戸」(中の障子)という仕切り(隔て)により想起される空間現象の様相について、その取り扱う時代背景を同じくする二つの文学作品に着目し、前回の『栄花物語』に続き、今回の『源氏物語』から当該部分を引用しつつ、それぞれの場合について建築論的検証を行った。

その際、あらたに〈奥〉という分析的な空間概念を通して考察すると理解し易いのではないかと、いうことの提示を試みた。つまり「中の戸」が仕切るものは、その相互の空間現象によっては、深い意味合いを持つ精神性を隔てていると考えられるのである。ただし、これはそこに居する人にとってのことに限定されることは、描写や文脈からも明らかであろう。つまり主は、頓着なく自由にその仕切りを行き来することができる。すなわち寝殿の西面であろうが東面であろうが、突然に来訪できるのである。その際の来訪された側の人々の狼狽ぶりの描写もみた。このように主にとっては、「中の戸」は単なる障屏具(仕切り)の一つでしかないのかもしれない。

しかし、たとえば東面と西面に隔て分かれて居する人たちにとっては、その意味合いが全く異なってくると考えられる。引用文にもあるように、打ち壊すことは容易いと、物理的には脆弱なものと表現されていた仕切りが、その隔てられる両者の関係性によって、盤石の重みをもち始めるのである⁶⁾。

つまり本発表に即していえば「中の戸」を開いて対面することは、すなわち相手方の〈奥〉までも垣間見ることになるのではないかと。もちろん相互の場からすれば〈奥〉を垣間見られていることになる。ただし、この空間概念としての〈奥〉には実体がなく、それゆえお互いともに行くことはない。ゆえに空間現象として読み取ることが重要となるのである。

これまでの考察から「中」—〈奥〉という空間的な対概念を独自に設定することが可能になるのではないかと、ということが目論まれるが、紙幅の関係上、次の課題としたい。

〔註〕(出版年は、引用者において西暦年に統一した。)

- 1) 川本豊、市川秀和「古典文学にみる「中の戸」の仕切りの建築論(1) —『栄花物語』の場合—」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第58号・計画系、2018年(609~612頁)。
- 2) 増田友也「隔離 — 壁」『日本建築学会研究報告16』1951年。(『増田友也著作集I』ナカニシヤ出版、1999年所収)。増田友也および「建築論」の京都学派については、市川秀和『「建築論」の京都学派』近代文藝社、2014年に詳しい。
- 3) 引用書頭注8(④123~124頁)。
- 4) 国文学分野での「中の戸」に関連する研究の一例として次の論稿をあげておく。
堀江マサ子「「中の戸開けて」対面する紫の上 — 六条院の秩序との関わりにおいて —」『源氏物語の「今」 時間と衣食住の視点から』翰林書房、2015年。
明石姫君の母として紫の上が女三の宮と対面する場面を考察されたもので、それは身分差を顕わにしない独自の方法であった。(吉井美弥子書評『日本文学』七 日本文学協会編、2016年。)
- 5) 分析概念としての〈奥〉については、川本豊「〈奥〉の精神的考察 —『讃岐典侍日記』(下巻)における時間・空間—」『佛教大学大学院紀要文学研究科篇』第40号、2012年など、実体あるいは特定の場所としては捉えきれないという側面を指摘した。
- 6) 金秀美『源氏物語の空間表現論』武蔵野書院、2008年。「第一章『源氏物語』における障屏具 — 可変的な物語空間を作り出す装置として —」
〈建具を開ける〉行為は空間自体を変化させるものであり、またそれによりAとかBは〈移動〉といった能動的行動を随伴しなくても、そのまま〈自分の位置〉にしながら状況を変えることができるのである。(中略)固定した〈壁〉ではなく、移動可能な建具を隔ての具として設定することは、物語空間を自由自在に活用できると共に、その空間にいる人々の様々なありようや関係を形象化し、描くことも可能にしているのである。(244頁)

*1 福井工業大学 市川研究室 修士(文学) Ichikawa Labo., Fukui University of Technology, M.Litt.

*2 福井工業大学 教授・博士(工学) Prof., Fukui University of Technology, Dr. Eng.

詩歌にみる「住まうこと」の風景
—幕末の歌人・橘曙覧を通して—

正会員 ○川本 豊*1 同 市川 秀和*2

9. 建築歴史・意匠— 6. 建築論

住まう、写す、風景、田中喬、京都学派

1. はじめに —「住まうこと」と「写すこと」—

日本古典文学作品をテキストに、「住まい」に関する表象を取り上げ、そこに表れる空間現象の様相を読み取り建築論的考察を行なってきた(1)。その視座として、住居内部の奥へ向けた水平的な次元を一方に置き、もう一方で人々の住まいにおける行為や精神性(ここではそれらを住まいに対する「心性(マンタリテ)」とよぶ)の表象という垂直的な次元とも共鳴しつつ、独自の考察を巡らせてきたことを特記しておきたい。

さて「住まひ」という語は、《スミ(住)アヒ(合)の約》であるとし、生活し続ける、ずっと住む、あるいは一緒に生活するという、コト(行為)の意がまず上げられ、その後モノ(住居)の意が添えられている(2)。さらに「棲み・住み」については、あちこち動きまわるものが、一つ所に落ちつき、定着する意とし、スミ(澄)と同根とする。つまり「澄み・清み・済み」は、浮遊物が全体として沈んで静止し、気体や液体が透明になる事態であるとする。

さらに田中喬は、「住まい」を独自に深めるため、「写す」(映す、移す)という言葉(3)と密接にかかわらせる新たな視座を提示した。それに拠り「風景」という現象を切り拓くことが目論まれ、ここに田中の建築論の独自性の一つをみるのである(4)。次に、その論考の一部を引用する。(下線は引用者による。)

「住居」は、場所としての「住居」は、「人生」において開かれるところである。開かれたところに、人は宿り、宿りつつ写すのである。写しつつ宿るのである。森の木下も、里の大路も、そして乞食に立ち止まる家々の軒端もまたそのような場所である。(154頁)

論述の提示順序が前後逆になるが、次の部分では

心・身に踏み込んで身体論として、さらに具体的に述べられている。「写す」は「宿る」と対でつかわれていることにも注目されよう。

心・身は、家に宿り、宿る仕方の原像、原型に他ならない。心は身に、身の家に映り、宿るのである。意味が言葉(音声)に映り、宿るように、そのように写されて宿るのである。それはどこまでも親密な住人として、客人ならぬ主人として。そして親密な作者として。心は家に生き、家を生きている、家を表わしている。そのかぎり、この原基的な、原尺度的な心・身のあり方に拠って、外なる家屋に宿り、風景に宿り、天地に宿るという、写しつつ宿るという、それぞれの宿り方、写し方が何れか保証されるのであろう。(60頁)

本発表は、これまでの研究成果を基底とし、写すという田中喬の新たな視座を手がかりにしつつ、住まいを包み超えた「風景」の現象から「住まうこと」の実相を今一度深く考えてみたい。そこで考察テキストとして、幕末の国学者かつ歌人としても知られる「橘曙覧」(たちばなのあけみ)の和歌を取り上げる。

2. 橘曙覧と藁屋について

橘曙覧(1812~1868)は、越前福井城下の老舗商家である正玄家に生まれた。この正玄家は橘諸兄にゆかりの家柄とされ、後に曙覧が橘性を名乗ったのもこれによるとされる。嫡子であり一旦家業を継ぐのであるが、商いには向かず、若くして異母弟の宣に家督を譲り、足羽山「黄金舎」に隠居する。さらに37歳の時に黄金舎から三ツ橋に引越し「藁屋」と称し、ここで終生を過ごすことになる、つまりここが「終の棲家」となった。晩年、藩主の松平慶永(春嶽)が野遊びのついでとして、この藁屋を訪れてい

Topo-logical Study of Dwelling in the Japanese poetry, according to the *Tachibana-Akemi's poem*

KAWAMOTO Yutaka, ICHIKAWA Hidekazu

るが、藩主が武家でもない吾人に出向いて対面するという事は当時としては異例のことであり、当然のことながら曙覧は感激し和歌を詠んでいる。この際に、春嶽はこの呼称「藁屋」に対して「忍ぶの屋」とあらためよと屋号を授けている。しかし恐れ多いこととして、曙覧自らが用いることはなかったとされている。もちろんこの両者の関係は平田篤胤の流れをくむ福井藩士中根雪江の仲立ちがあつてのことではあるが、春嶽はその清廉な生きざまから曙覧を重用し、破格の扶持米を与えているのである。

では春嶽の目に「映る」藁屋とその風景は、如何なものであったろうか、春嶽の記述から引用する。

ちいさき板屋の浅ましげにて、かこひもしめたらぬに、そこかしこはらひもせぬにや、塵ひち山をなせり。柴の門もなく、おぼつかなくも家にいりぬ。(中略)すこし広き所に入りて見れば、壁は落ちかかり、障子はやぶれ、畳はきれ、雨もるばかりなれども、机に千文八百ぶみうづたかくのせて、人丸の御像なども、あやしき厨子に入りてあり。

(中略) 屋のきたなきこと、たとへむにもなし。しらみてふ虫などもはひぬべくおもふばかりなり。かたちはかく貧しくみゆれど、其の心のみやびこそ、いといとしたはしけれ。

かくやというほどの辛辣な記述である。もちろん藩主という高貴な御仁の目からではあるが、現実にもそう大差はなかろうと思われる。それは後述するが、曙覧自身の目にもほぼ同じように「映って」いたことが確認できるからである。しかし名君といわれた春嶽であり、すぐ後にこう続けている。

おのれは富貴の身にして、大廈高堂に居て、何ひとつたらざることなけれど、むねに万巻のたくはへなく、心は寒く貧しくして、曙覧におとる事、更に言をまたねば、おのづからうしろめたくて顔あからむ心地仕られぬ。

松平慶永「橘曙覧の家にいる詞」

思いつきの訪問とはいえ、ここに春嶽が映しみた藁屋に曙覧の境涯の風景が現れており、曙覧そのひとに一目置いていたかが、うかがい知れるであろう。

3. 「独楽吟」にみる写し取られた風景

橘曙覧は元号が明治に変わる直前に没したが、そ

の嗣子橘今滋が明治十一年に公刊した『橘曙覧遺稿志濃夫廼舎歌集』によって世に知られることとなった。旧来からの作法に則った和歌とともに、「これまで歌語として使われていなかった卑近な日常語を使いこなし、口語的な発想によって有りのまゝの生活を有りのまゝに歌い(5)」(傍点引用者)こむ斬新な作風は、かの正岡子規をして万葉以来と絶賛するところとなり、いわゆる明治期の和歌革新運動の先駆ともされている。その白眉が、上記遺稿歌集のうち「春明艸 第三集」に収められている「独楽吟」と呼ばれる52首であろう。「たのしみは」ではじまり、「〜とき」で結ぶという、ある意味で俗な形式をとっている(6)。その中から「住まうこと」を詠み込んだ歌を一部であるが次にあげてみたい。(ルビは省略した。)

たのしみは 艸のいほりの 庭敷き ひとりこころを 静めをるとき(553)

たのしみは すびつのもとに うち倒れ ゆすり起こすも 知らで寝し時(554)

たのしみは 妻子むつまじく うちつどひ 頭ならべて 物をくふ時(558)

たのしみは 朝おきいでて 昨日まで 無かりし花の 咲ける見る時(561)

たのしみは 昼寝せしみに 庭ぬらし ふりたる雨を さめてしる時(577)

たのしみは 昼寝目ざむる 枕べに ことごと湯の 煮えてある時(578)

たのしみは 家内五人 五たりが 風だにひかで ありあへる時(582)

たのしみは 機おりたてて 新しき ころもを縫ひて 妻が着する時(583)

たのしみは 三人の児ども すくすくと 大きなる 姿みる時(584)

このように平凡な暮らしや家族の日常が、平易な言葉で詠まれている。今日では当然のことであるが、公文書などが漢文調の文語文であった当時に、このような斬新な手法をまさしく「発見」した曙覧の先進性が、さきにもみたように子規らを驚愕させたのであろう。そこには一家の生活の風景が、言葉によってまさしく写し取られているといえるだろう。それも藁屋とはいえ、なにあらう我が家なのである。

この住まう場所としての「我一家」ということが、ふつふつとこれらの歌群に表象された言葉からうかがい知れるのである。たとえば、なにげない昼寝という現象(577、578)からは家内での安らかなひと時の時間経過、あるいは一晩の時間経過(561)が、あるいは季節の経過(560)が、住まうこととして、それがたのしみとして謳われている。そしてさらには家族の平穏が高らかに詠まれる。しかし曙覧はこれまでに三人の娘を幼くして亡くしている。三女健子がようやく四歳になったとき痘瘡で亡くなり「きのふまで 吾が衣手に とりすがり 父よ父よと いひてしものを(20)」と、親としてもっとも悲しい出来事に対する慟哭の歌を詠んでいることを抜きにして、これらの歌はあり得なかったであろう。ここに住まいに「住まうこと」と「生きること」とに通底するもの(風景なるもの)を見落としてはならないのである。

4. 「住まうこと」と「詠うこと」

さきに、春嶽が映しみた曙覧の藁屋の風景を確認した。では曙覧本人は、「我が家」に対してどのように「詠うこと」を求めたのか。「我が家」に我が家族とともに「住まうこと」が何よりの喜びであり、あばらなる伏せ屋を超越した心情であろう。「独楽吟」とは異なる歌の中から、選び出してみたい。

あばらなる 屋戸はやどにて すみわたる 月

は我にも さもにたるかな(14)

春雨の もるにまかせて すむ庵は 壁うがた

る おそれげもなし(23)

薄しろう なりてたまれる 雪の上も 汚さで

一日 見る庵かな(68)

けぶり艸 それだに煙 立てかねて なぐさめ

わぶる 窓のつれづれ(92)

人は皆 見さして寝たる 小夜中の 月を静か

に 入る窓かな(121)

壁くぐる 竹に肩する 窓のうち みじろぐた

びに かれもえだ振る(328)

賤の夫も 生けるしるしの 有りて今日 君来

ましけり 伏せ屋の中に(620)

客人も あるじも身をぞ 縮めをる 下冷えつ

よき 狭き屋のうち(657)

山里と いへどうるさき ことまじる ただ吾

が廬を 出でざるがよし(676)

霜のうへに 冬木のかげを うす黒く うつし

てふくる 庭中の月(681)

「あばらなる」(14)と詠みかけており、決して良い住まいであるとは自身でも認めていないことは間違いない。しかしそのあとに「すみわたる月」と比較しているところからもそれに頓着している気配はまったく感じられない。たとえば、328番歌の詞書きには「ひた土に蒔しきて、つねに机すゑおく、ちひさき伏せ屋のうちに、竹生ひいでて、長うのびたりけるを、其のままにしおきて」とあり、土間に机を置いて書斎としていたようで、そこから竹が伸びてきたがそのままにしておいたとある(7)。

我が家に住むことで満ち足りており、煙草銭に困ったり(92)、冷え込んだ時には客人にも辛い思いをさせたりと(657)、外目には決して安楽とは言えないであろうが、逆にそれを楽しんでいるようにも思えるのである。さらには、外へ出るとうるさいので、我が家(廬)に居るのが一番(676)とさえ詠むのである。これは鴨長明『方丈記』(8)にある方丈草庵に対する心性と通底するものが認められよう。

はじめに春嶽が藁屋を訪れた時の記述をみておいたが、この時の曙覧の詠歌(620)を取り上げておきたい。遺稿歌集のうち「君来艸 第四集」の冒頭歌となっている。ここでも自ら「伏せ屋」と詠んでいるが、これは決して謙遜ではなく本音と受け取ってよいであろう。曙覧がもっとも有り難く思ったことは、最後の「の中に」という言葉に集約されているであろう。名君といわれる藩主がことあるうに、我が家に、そして家の中に、まさしく自分の内(奥)に入り込んだのである。これほどの名誉はないと心底感じた上での「詠うこと」としてとらえたい。

5. むすび — 「住まうこと」の風景 —

「住まい」に「住まうこと」の事態を詩歌の世界に認めて、ここでは我が家に住まい、そして詠うことが可能であった事例として、橘曙覧の遺稿歌集をテキストに考察し、生きることの風景を垣間見た。

そこには自分の住まいという確かな住処を持ち得

た者が、高らかに「詠うこと」の喜びの心性を認め得たのではないだろうか。それは貴賤や伏せ屋などにかかわらず、自らの住处ということにつきるのである。それほどに、住まいに「住まうこと」の、人にとっての意味の大きさが認められるのである。

最後に曙覧の歌から、国学者・平田篤胤につながる独特な視点を取り上げておきたい。

体といふ 宅はなるれば 天地と 我の間に

垣一重なし (720)

天地の 間に隔て なき魂を しばらく体の

つつみをるなり (721)

物皆を 立つ雲霧と 思へれば 見る目嗅ぐ鼻

幽り世と同じ (722)

幽頭 一重の蟬の 翼もさへず 人の臭いもた

ぬ 吾がまなこには (723)

720番歌に限定すれば、天地の「間」にこそ、人は住まうのであり、冒頭で述べた田中喬の建築論に通ずるであろう(9)。さらに続く体(たい・から)を宅(たく・いへ)と捉えるなら、仮の住まいの実相が詠われていよう。ここに風景なるものへ踏み込まなければならない問題が定位されているのである。

【註】(橘曙覧の歌の引用等は、水島直文・橋本政宣
編注『橘曙覧全歌集』岩波文庫、1999年
によった。なお、その他に「福井市橘曙覧記
念文学館」編集による資料等も参考にした。)

1) 拙稿(2019)「古典文学にみる「中の戸」の仕切り
の建築論(3)」日本建築学会大会講演梗概集など。

2) 『岩波 古語辞典』補訂版、1990年。

3) 田中喬「第二章 人生と住居—五合庵の場合」

『建築家の世界 住居・自然・都市』

ナカニシヤ出版、1992年)。

住居は、スベキと読まれてもよい。それは生活するための性能を充足した道具、プラスいわゆるデザインというそれらの合成物ではない。勿論家財として所有されるものでもない。人生がそこで生きられる、そしてそこで死んでいく空間的な、時・空的な場所である。いわゆる建て造

られた家にかぎらない、自然の風景もまたそのような場所である。人生「と」住居というその間は、住むこと、宿ことであり、写すことでもある。住むことは、居ること、坐すことである。(71頁)

4) 市川秀和『「建築論」の京都学派—森田慶一と増田友也を中心として—』近代文藝社、2014年。
武田五一や森田慶一を初発として現在まで連綿と続く建築論の系譜がある。田中喬もこの流れの只中であつたことはいままでもない。

5) 『橘曙覧全歌集』岩波文庫、1999年。

和歌の近代化を推進した正岡子規(1867~1902)により(中略)「趣味を自然に求め、手段を写実に取りし歌、前に万葉あり、後に曙覧あるのみ、」(中略)とまで絶賛された(解説389頁)

曙覧の歌が、中世以来の伝統的な詠風を打ち破って近世の歌壇に新しい歌風を樹立し、明治の和歌革新運動の先駆をなしたと評される所以である。('独楽吟'について 解説390頁)

6) 福井市橘曙覧記念文学館が中心となって、「たのしみは〜とき」という作歌を広く募っており、現在までこの形式が一般に詠み継がれている。

7) 同じく福井市橘曙覧記念文学館の2階には、この藁屋を復元したものが公開されている。

8) 佐竹昭広校注『方丈記』新日本古典文学大系39、岩波書店、1989年。

今、サビシキ住マヒ、一間ノ菴、ミヅカラコレヲ愛ス。自ツカラ都ニ出デテ、身ノ乞匄トナレル事ヲ恥ヅトイヘドモ、帰リテコヽニ居ル時ハ、他ノ俗塵ニ馳スル事ヲアハレム。(27頁)

山中にある方丈とされる小さな仮の住まいであるが、自らの住まいの内と外という身の置き所によって、その心性の反転をみることができるのである。

9) 田中喬 前掲書

風景に生きた良寛は、天なる風光のもと、地なる風土にふれて生きたのである。風光・風土の間こそが、端的に、宿り住むべき、住合うべきところであつたと言われてよい。(145頁)

*1 福井工業大学大学院 工学研究科 博士後期課程

*2 福井工業大学 教授・博士(工学)

Graduate School, Fukui University of Technology
Prof., Fukui University of Technology, Dr.Eng.

田中喬 建築論研究の軌跡 —建築論の京都学派に関する基礎的研究(2)—

正会員 ○川本 豊*1 同 市川 秀和*2

9. 建築歴史・意匠—6. 建築論

田中喬, 建築論, 京都学派, 阿藤伯海, 住まうこと

1. はじめに 田中喬と建築論の京都学派

本発表は「建築論の京都学派に関する基礎的研究」として、この学術的系譜の広がりを探究する目的から、その一人田中喬の基礎研究の初発として位置づけられる。ここでいう「京都学派」は一般に、京都大学での西田幾多郎をはじめとする哲学の分野がイメージされることが多い。しかし建築学の分野においてもその独自の理論展開が行われていることは若干すそ野が広がったとはいえ、まだ一部の研究者のみが知るばかりであることは否めないのである(1)。

その学術的系譜の中軸をたどると次のようになる。京都大学において建築学科の創設に関与した武田五一(東京帝国大学卒、1920(大正9)年教授着任)にはじまり、次いで建築論の構築に尽力した森田慶一(東京帝国大学卒、1922(大正11)年着任、1934(昭和9)年教授)を創成期とし、その高弟であり西洋哲学や仏教書などを含めた広範な理論展開により建築論の京都学派としての基盤を整えた増田友也(京都帝国大学卒、1950(昭和25)年着任、1962(昭和37)年

教授)、その直系で当時の増田研究室を支えた助教授であった前川道郎・田中喬・加藤邦男・玉腰芳夫などがあげられる(図1.)。

そこで本発表は、以上の系譜の中でも未だ紹介されていない田中喬(図2.)を取り上げ、「増田友也から田中喬へとつながる「住まうこと」への問い」を今後のテーマとする立場(2)から、まず田中喬の経歴と業績についての整理を行うこととした。

増田友也については、1999年3月に前川道郎を代表とする編集委員会により『増田友也著作集』全五巻が出版されている。なお、その実質的な作業は田中喬によって進められたという。さらに、2023年12月には、田路貴浩編著『増田友也の建築世界』が刊行された。当初は作品集として企画された経緯もあり、新たに掘り下ろされた所謂モダニズム建築の現在の姿が掲載されている。さらには遺された膨大な資料群は京都大学桂図書館に移管され、今後の研究に活用されることが期待されるのである。

一方、田中喬の場合は、その遺された資料は増田に比して少ない。生前に、田中自身が敢えて著作以外の研究ノートなどを処分しようとしたことも伝えられていることから、今後の研究を本格的に進めていく

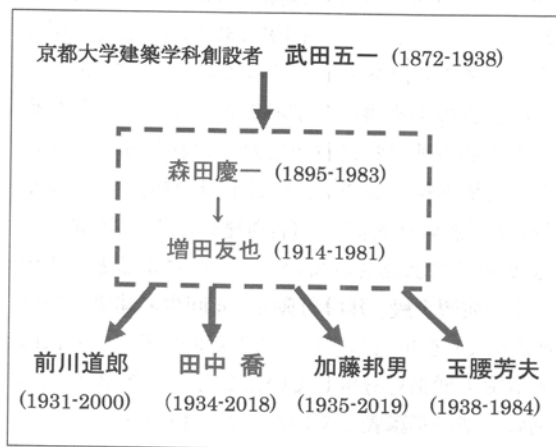


図1. 建築論の京都学派の系譜

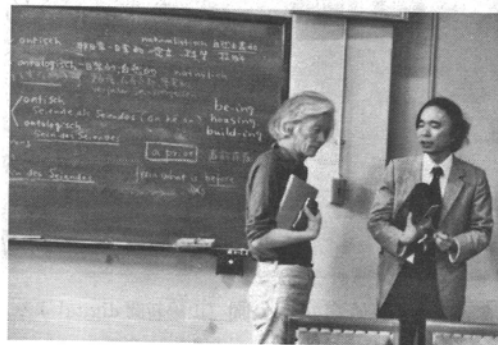


図2. 増田友也と田中喬

TANAKA Takashi: Trajectory of Architectural Theory Research

A Fundamental Study on Architectural Theory of Kyoto-School Part 2

KAWAMOTO Yutaka, ICHIKAWA Hidekazu

にあたり困難になると考えられるのである。

以下の本文では、まず田中喬の出自から学生時代、研究生生活などをとおして、その人物像を中心に整理を行うこととする。これにより次からの田中喬研究の基礎となる。なお主な業績については、既にまとめられている(3)ので参照されたいが、最後に簡単に紹介する。

2. 生い立ちから学生時代まで

田中喬は、1934(昭和9)年8月30日、広島県福山市にて、田中家の次男として生まれた。祖父と父は、地元の起業家として知られており、田中は恵まれた環境で育ったようである。

田中家の親戚となる阿藤家の長男・伯海(1894-1965)は、第一高等学校、東京帝国大学文学部西洋哲学科を卒業後、京都帝国大学で狩野直喜(君山)のもとで支那学を修めた。そしてこの出会いが漢詩へと導き、終生の師として往来されたようである。

この阿藤伯海が、建築を志す田中喬に与えた影響は大きく、その生き様は、伯海を彷彿とさせるものがある(4)。伯海の甥となる田中は、阿藤家の遺された土地・建物を後年に相続したが、1999(平成11)年故郷の岡山県浅口市鴨方町に寄贈して整備後、2006(平成18)年「阿藤伯海記念公園」(総面積6500㎡)として開園されている(図3。)(5)。なお、公園内の旧居は町史跡に指定されている。

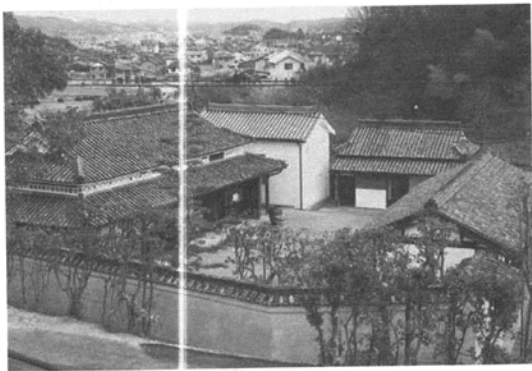


図3. 阿藤伯海記念公園(山陽新聞 digital より)

田中はすでに中学生の頃には『桂離宮』(藤島亥治郎著、年代からして番町書房版か)を読み、建築に興味を深めていたとされ、その後に森田慶一のことを

聞き、1953(昭和28)年広島県福山東高等学校(現広島県立福山誠之館高等学校)を卒業後、京都大学工学部建築学科に進学した。在学中については、村田治郎教授による「民家研究会」が神戸市北部の「箱木家住宅」の現地調査を1952(昭和27)年に実施した際に、師・増田友也とともに、学生の田中喬をはじめ、前川道郎や加藤邦男らも報告書の作成に参加したことが知られている。そして1958(昭和33)年同卒業後、修士課程に進み、1960(昭和35)年に修了した。その後米国のカーネギー工科大学芸術学部建築学科に留学し、修士課程を修了した。

3. 研究者・教育者として

1962(昭和37)年9月に助手として採用された田中は、講師を経て、1964(昭和39)年4月に助教授に昇任した。当初は増田教授のもとで建築意匠学講座を担当したが、1967(昭和42)年に建築施設計画講座が開設されるにともない、堀内三郎教授のもとでの配置替えとなり、学部授業において「建築行動学」を、修士課程では教養部助教授・玉腰芳夫と分担して「建築論特論Ⅲ」を担当した。なお、この頃の田中は建築設計にかなり従事しており、代表的な建築作品として「近衛ホール(京都大学附設外国人研究者宿泊施設)1966」、「万博:日本庭園休憩所1969」などがあげられる。

1970(昭和45)年度の建築学科標準科目配当表によれば、ただし当時1・2回生は教養部として工学部混合クラスで吉田南キャンパスにおいて学び3回生から時計台の本部構内で学ぶことになっていたため工学部の各専門学科に移ってからの科目配当表となるが、建築学科の場合は、科目配当の都合上、「建築概論」と「設計演習第一」(古典建築の模写が中心)だけは2回生で実施されている。これによると、田中は、設計演習全般、建築行動学、4回生の建築学演習(所謂ゼミ)を担当していたことがわかる。さらには建築概論を増田も分担していたこと、また3回生の建築論を増田が講義していたこともわかる。

田中は、1976(昭和51)年に学位論文『建築(的)事象の研究』で工学博士を授与されている。指導・主査は増田友也教授である。以下に、『京都大学工学部建築学教室六十年史』において田中の学位論文に特

にふれられているので、その個所を紹介する。

田中の研究は、建築における人間行動に注目する立場からする、建築そのものの原論的解明に向けられた。学位論文において田中は、建築家の建築行為の一面としての学問的思索の自らの実践に身をもって立ち入り、西洋古典を糸口にしつつ、そこからの現象学的解釈として、現存在なる人間の行為、意識に即して、端的に建築とは何ごとであるかを問い答えようとし、さらには、何ごとが建築をあらしめるかを問い答えようとし、現今の混迷する建築の状況のうちにあって、それによって全体的な建築理論の建立、もしくはその復原を意図した。それは、通常の建築理論のいわゆる帰納的、実証的方法についての方法論的反省をふまえて、建築—技術の本質的構造を意識の構造に基いて限定定著し、建築—技術論としての建築理論の構築を目論むものであった。(p.160)

1978(昭和53)年恩師であった増田友也が定年退官する。最終講義は「建築以前」である。増田は、1980(昭和55)年に福山大学教授に就任するも、翌1981(昭和56)年8月、病にて逝去する。その直後ということになるが、同年10月に田中は「壁への壁」(『建築と社会』第715号)という意味深い論考を発表している。また1984(昭和59)年に論文「建築—学 初步」(『建築雑誌』Vol.99, No.1228)を発表、冒頭で阿藤伯海の漢詩を引用している。建築作品として1982(昭和57)年に「岐阜県口腔保健センター」が、そして1984(昭和59)年には、インド・ラジギールの「法華クラブホテル」が完成している。

田中は1985(昭和60)年、京大教養部図学教室に移籍することになる。1989(平成元)年、京都大学教養部教授に昇任、同年に日本建築学会賞(論文部門)を授賞している。また『建築術の実践：京都の場合』が出版された。1991(平成3)年には、京都大学大学院人間・環境学研究科教授として異動、1992(平成4)年に『建築家の世界』を出版、1994(平成6)年には京都大学田中喬研究室の修了生によって結成された「鏡の会」(事務局 佐野春仁)より私家版『田中喬講演集』が田中の還暦にあわせて印刷配布された。1997

(平成9)年に博士論文(6)の指導を終えて退官し、京都大学名誉教授の称号を受ける(図4.)。この年には『小建築論』が出版されている(図5.)。

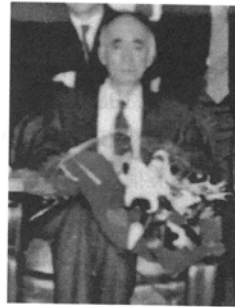


図4. 京大退官記念

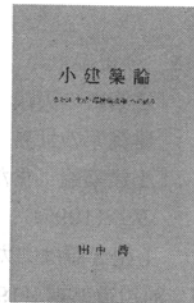


図5. 『小建築論』

同年に神戸国際大学経済学部教授に就任、さっそく論文「終のすみか—自然」(『神戸国際大学紀要』第53号)を発表している。2003(平成15)年に69歳で教壇を離れ、後の追悼文(3)の言葉を借りれば、閑雲野鶴の身となられたのである。

4. おわりに 総括と展望

田中喬は、教壇を離れた2003(平成15)年の7月に「人・木・家」と題された特別講演(前田忠直研究室)を、京都大学建築学科第一講義室に於いて行っている。そこで自身の後半生について振り返り、京大教養部に移って6年、大学院人間・環境学研究科で6年、そして神戸国際大学でも6年と、不思議な機縁を回想していた。

洛西、西山の麓の、大原野に居を構えられ、自適の生活をおくられたものと推察する。古希に際して、「老懶の戯れに」と題して、本歌、本歌取り、雑詠などとして二十首を認められている。少し引用すれば、そこには斎藤茂吉がうかんでいるのであろうか。

・ゆめの世に 且つまどろみて ゆめをまた

詠うも夢も それがまにまに

・過ぎ来つる この年年を うたかたの

うかびしごとく 思うことあり

そして2018(平成30)年5月28日、83歳の生涯を閉じたのである。

高弟のひとり、西垣安比古は翌年の追悼文(7)で、「田中先生は教育の場においても「距離をおかない後退」という立場に立られていた。それは建築家としても学究としても教育者としても終始一貫してい

た。」と述べている。

そのそこには、かの阿藤伯海がうつっているとも考えられるのである。

以下に、今後のため、主要業績を示す。

単著：『建築術の実践 京都の場合』（1989）

：『建築家の世界 住居・自然・都市』（1992）

：『小建築論 または生活・環境構成論への試み』（1997）

上記3冊はナカニシヤ出版より刊行される。

共著：前川道郎編（1998）『建築的場所論の研究』

中央公論美術出版。（田中「建築一術 初歩 — 虚白の場から」所収）

：日本建築学会編（2008）『建築論事典』彰国社。（田中「建築論」所収）

論文：「行動と空間的状况」（1968）

：「建築的なことの〈定著〉」（1972）

：「壁への壁」（1981）

：「建築一学 初歩」（1984）

：「終のすみか — 自然」（1997）

：「ある断想—人間・コンクリート・景観」（1998）

（なお論文の掲載誌は、略す）

次の展望としては、田中に大きな影響を与えたと考えられる阿藤伯海とその住まいの風景との関係などを、上記論考等を通して考察を行う予定である。

【参考文献】

・『京都大学工学部 建築学教室六十年史』（1980）同編集委員会。

・『京都大学建築学 100 年の歩み』（2021）100 周年記念史出版編集委員会、京都大学学術出版会。

・『北陸都市史学会誌』（2023）第 28 号。

・清岡卓行（2010）『詩礼伝家』復刻版、財団法人吉備路文学館。（初版：講談社文芸文庫 1993）

・定金恒次（2019）『阿藤伯海の世界』岡山文庫 316、日本文教出版。

・「誠之館人物誌」福山誠之館同窓会。

上記のほか、2019（令和元）年 8 月に開催された「田

中喬先生を偲ぶ会」（「鏡の会」主催）にて配布された資料も参考にした。なお、「鏡の会」はこの「偲ぶ会」をもって解散となった。

【註】

（1）市川秀和（2014）『「建築論」の京都学派 — 森田慶一と増田友也を中心として —』近代文藝社。

（2）川本豊、市川秀和（2021）「日本古典文学にみる「住まうこと」の建築論的考察」『日本建築学会計画系論文集』第 86 巻 第 787 号。

（3）藤原学（2019）「建築の木—田中喬先生追悼」『建築論研究』第 1 号。

（4）阿藤伯海から、「子塾」という号をおくられていゝ。この伯父でもある静隠の漢詩人を抜きにしては、田中喬を語れないであろう。

（5）50 歳で第一高等学校教授を辞し、帰郷した伯海は、戦後の農地改革に際して、小作人に対価なくその農地を譲ったとされ、相続したのはその遺った土地・建物ということになるだろうか。

一高教授時代の教え子には、三重野康（元日銀総裁）、高木友之助（元中央大学総長、専門は中国哲学）、清岡卓行（芥川賞作家）らがいる。

伯海は退隠後も、岡山大学や学習院大学から「教授」として就任の要請を受けるが、すべて固辞している。独身をとおり、自宅（臥龍洞、虚白室）を拠点として、漢詩作りに専念することになる。また武田五一や藤井厚二も同郷の福山出身である。さらに高校の 2 年後輩には、同じく京都大学にて増田友也に師事し、のちに福山大学教授となった建築家の瀧光夫がいる。

（6）香西克彦（1997）「「風景なるもの」について—建築論からの考察」。その後、『風景現象の建築論的研究』（中央公論美術出版 2012）が出版される。

（7）西垣安比古（2019）「田中喬先生を悼む」『京大建築会会報』Vol.84。

「距離をおかない後退」とは、陶淵明の詩や斎藤茂吉の「自然自己一元の生」などを例に、距離をおかず自然自己一体でありながら、後退してそれを写すということである。

*1 福井工業大学市川研究室 博士（工学）

*2 福井工業大学 教授・博士（工学）

Ichikawa Labo., Fukui University of Technology, Dr. Eng.
Prof., Fukui University of Technology, Dr. Eng.